

「易しさ」と「難しさ」と

—「マックで中国語」始末記—

内田慶市

文科系の、しかもコンピュータとはおよそ無縁の感すらある中国語学を専門とする私が「マックで中国語」と言う本をひつじ書房から上梓したのには幾つか理由がないわけでもない。

コンピュータと中国語には古くて新しい関係がある。古代中国人の発想法に「陰陽二元論」があるが、その言語への反映が、たとえば「反訓」とよばれる現象である。「乱」は「乱れる」という意味の他に「治まる」という全くその反対の意味を持っている。同じように「離」に「離れる」と「かかる（網にかかる）」という意味があったり、現代語でも「給」は「あげる」「くれる」、「借」には「借りる」と「貸す」という意味を持っていたりする。「売る」「買う」は、声調こそ違え、音はいずれも「mai」である。まさに「正反合=対立物の統一」の世界がそこにはある。またこのような陰陽二元論から世界の森羅万象を表現しようとしたのが「易」であり、この原理はまさにコンピュータの原理、すなわち「二進法」そのものなのである。「易」の「卦」は上下3本（上卦と下卦）ずつ、合わせて6本の棒（爻）からなるが、その棒に「陰」「陽」の二種類があり、その組み合わせは全部で64通りになる。コンピュータの用語を使えば、「上位3ビット」と「下位3ビット」の組み合わせということである。

コンピュータには不向きと思われがちな中国語が実はこのように、コンピュータと極めて近い位置にあったのである。

ただ、原理的にはそうであっても、やはり中国語をはじめとするアジア系の言語、いわゆる2バイト系言語は、1バイト系のヨーロッパ系の言語に比べてコンピュータで扱うには困難が伴うものであった。

私がコンピュータを扱うようになったのは、自分の教育、研究上の必要からであるが、最初の頃は、とにかく中国語を表示出来ることが感動のものであった。ただ、使っていくにつれ、同じ文書内での日本語・中国語・英語の混在や、データ処理において、98やDOS/Vではどうしても不満が残り、最終的にマックを使うようになったわけである。マルチリンガル環境はマックに一日の長があった。（ただし、現在では

Windowsでもある程度可能であるし、UNIXならば更にいろんな可能性がある)ただし、マックでも中国語環境の構築に際して、当時はまだ厄介な問題を多く抱えていた。中国語システムがなかなか入手できなかつたり、入手しても漢字トークに組み込むのに様々な障害があったりで、そんな問題を解決するためにNiftyの外国語やマルチリンガル関係のフォーラムに入会することになった。

その後、チャイニーズ・ランゲッジキットが登場して、ようやく現在のように中国語の環境が容易に構築できるようになり、マルチリンガル環境は使える段階に入ったと言える。ところが、キットの登場によって日中混在環境を必要とするユーザが一気に顕在化するのに伴い、一方ではそのインストールや入力方法等でつまづく人も増えてきた。Niftyのフォーラムでもそれに関する質問が多く寄せられるようになり、「中国語システム構築のためのハンドブック」の必要性を強く感ずるようになった。

そんな時に、ひつじ書房房主の松本さんと偶然知り合うことになった。マルチリンガルに関心を持つ有志で、マックワールドエキスポでマルチリンガルのセミナーみたいなのをやろうという話が起り、その呼びかけ人の一人が松本さんであった。

ひつじ書房については、近代語関係の書籍や私の大学時代に英文科の先生をしておられた澤田治美先生の著作を出している所ということぐらいしか知らなかったが、まさかそこから「マックで外国語」のシリーズを出すことになろうとは、まことに不思議な「縁」である。

「マックで中国語」はひとえに著者の怠惰によって、予定よりも大幅に遅れて刊行されたが、反応は様々であった。「待望久しき本」というお褒めの言葉や、一方で「値段が高い」という意見、中でも特に考えさせられたのは「序章 初心者のために」についてである。

この章は、初めてマックを触る人のために、マックの基本的な操作等を述べたものであるが、「もっと超初心者のために」が必要だという意見があった。これでも随分易しく書いたつもりであったが、読む側に対して著者の思いが伝わらない場合もあるのである。「それは読む側の責任だ」「ある程度は自分で勉強してもらわなければ」「そこまで面倒は見れないよ」と言ってしまうのは簡単ではあるが、「初心者のために」とした以上はやはり書き手の責任は問われなければならないだろう。

近頃「猿にもわかる……」とか「極楽・気楽……」とか言うタイトルの本が多いが、実際には「猿」どころか人間でもわからないものが大半である。「猿にもわかる」と言う以上は必ず猿にもわかってもらわないと責任を果たしたことにはならないのである。

最近私はマック以外にFreeBSDとかLinuxというPC-UNIXを使い始めているのだが、まさに「超初心者」の段階である。インストールの段階からしょっちゅうつまづくわけだが、その都度メーリングリストなどで質問をしている。ところが、「カーネルを……」「ブートの際に……」「コンフィギュレーションを……」とか専門用語がポンポン飛び出し、あげくには「その辺りは基本的な本で勉強してから聞きなさい」とまで言われたりしている。答える側には自明のことであっても、聞く側は必ずしも自明でないことは多いのであるが、そのことを答える側はわかってはいないわけである。このことは、別にコンピュータの世界だけでなく、日常茶飯事のことであり、言語生活の中ではよくあることである。コミュニケーションの難しさはそこにある。

言語は人の表現の一つであり、対象—認識—表現という過程的な構造を持っている。聞き手や読み手は、表現された形式(文字や音声)を手がかりに相手側の認識、さらには対象へと追体験していくことになるわけである。また、語彙や語法は「言語」そのものではない。言語は実体ではなく、話し手や書き手を離れて言語は存在しない。言語を存在させるものは「人」であり、「場」である。文体や語彙は「易しく」ても、それが相手側に「易しい」とは限らないのである。そして何よりも書き手が対象を如何に理解しているか、その理解の度合いが問題となってくる。認識の深さである。それが深ければ、「易しい」言葉でも内容を深く表現することもできるし、浅ければ如何に文体は平易でも相手方に理解させるのは困難であるということになるであろう。

私は言語論、言語観を時枝誠記、三浦つとむの著作から多くを学んだが、私も、三浦つとむの「日本語はどういう言語か」「ころとことば」のように「易しい」言葉で深い内容の文章をいつの日か書ければと願っている。

まこと「易しい」ことは「難しい」ものである。

(うちだ・けいいち／関西大学教授)